

小論文

生徒同士の協働で小論文を作成し、相互に評価させることで考え続ける姿勢を育む

●3年生文系の2クラス合同の小論文対策講座で、各グループがほかのグループの代表答案を読み、各グループ内で内容について議論し、評価する。生徒全員が、答案の評価の根拠を説明できるようにすることが目標だ。(P.25に授業デザインを掲載)

グループごとに作成したアウトラインに沿って各自が書いた小論文をグループ内で読み合う。アウトラインは同じでも語彙力や論理構築力などによってできた小論文が人と異なることを実感させることがねらい。前時の授業でグループの協働で作成したアウトラインを消化できなかった生徒に、「他者の考えを自分のものにする」ことの大切さを伝える。

梨子田先生のアクティブ・ラーニング

他者の視点を通して小論文のスキルを体得

地理歴史・公民科を担当する梨子田喬先生は、校内で小論文講座を実施している。生徒同士で答案を作成し、相互評価させる活動を通して、論の組み立て方、段落の構成力、具体例の提示の仕方など、小論文のスキルを生徒たちに体得させようとしている。



岩手県立大船渡高校

梨子田喬 なしだ・たかし

教職歴15年。同校に赴任して4年目。進路指導課。地理歴史・公民科担当。アクティブ・ラーニングの実践は7年目になる。

岩手県立大船渡高校

◎1920(大正9)年創立の岩手県気仙農学校が前身。「自主独立」の気概を持ち、文武一道に取り組む学校を目指す。インターハイ出場の弓道部や空手道部など、部活動も盛ん。

◎設立 1949(昭和24)年

◎形態 全日制・定時制/普通科/共学

◎生徒数 1学年約200人

◎2017年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、帯広畜産大、岩手大、東北大、山形大、東京藝術大、新潟大、金沢大、釧路公立大、岩手県立大などに86人が合格。私立大は、北海道医療大、岩手医科大、東北学院大、慶應義塾大、津田塾大、東京理科大、明治大などに延べ182人が合格。

◎URL

<http://www2.iwate-ed.jp/ofu-h/>



各グループの半分のメンバーが隣のグループのメンバーと入れ替わり、自分たちがつけた評価の根拠について説明した。その後、自分のグループに戻って今日の議論について振り返り、ほかのグループの評価との違い、各自の感想などを共有した。最後に、個人で沈黙思考して振り返りを行い、「答案評価シート」に感想を記して提出した。



「答案評価シート」を使って、ほかのグループの代表答案に点数をつける。その点数を黒板に書き出し、得点の高かった3グループの代表答案作成者に拍手を送る。

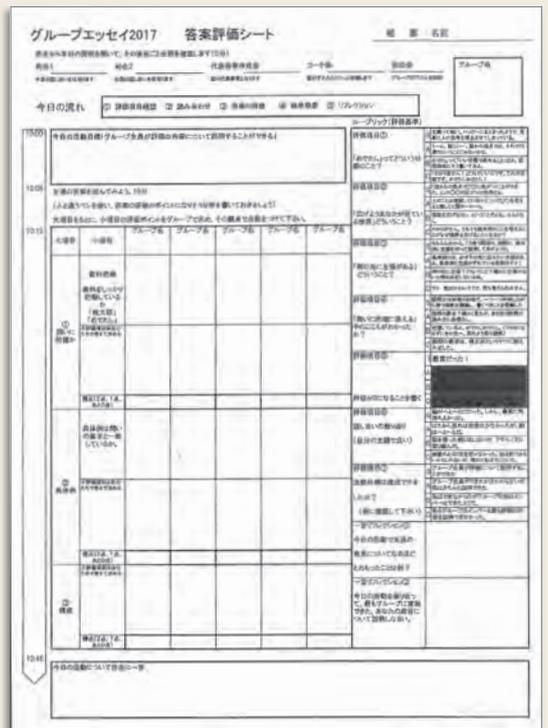


グループ討議を通して、人の意見を聞き、自分とは違う価値観があることを知り、刺激を受けたのと同時に、他者の視点を盛り込む難しさを感じました。

頭の解説は短く、議論中の介入も1、2回にとどめる。机間巡視をしながら生徒の議論に耳を傾け、設問を踏まえているか、方向性がずれていないかを確認し、全体で共有すべきことが出てきたら、黒板に大きくメモ書きして注意を促す。「生徒が自ら気づき、修正することが重要です。教師が指示をしすぎると、その都度議論が中断されるばかりか、生徒にとってやらされる活動になってしまいます」

板書で不十分であれば、最も大切な事項だけ口頭で説明する。それでもできるだけ手短かにし、かつ議論の半ばまでに済ませておく。学びが深まる終盤の時間帯に、生徒の邪魔をしないためだ。今回は、構成をどう評価すればよいかで苦戦しているグループが目立ったため、「各段落の主張を要約し、文章の筋が通っているかを確か

■答案評価シート



左側にほかの5グループの評価を記入。右側には梨子田先生が設定したルーブリック(評価基準)を掲載しており、代表答案を評価する際の参考にさせる。

めてほしい」とアドバイスした。

場づくりへの配慮

役割を固定化させないことで社会で必要な協働性を育む

深い学びを生み出す議論にするには、生徒がアクティブ・ラーニングの意義を十分理解していることが重要である。そのため、授業前に「一人ひとりが学びのプレーヤーである」「目標は脳がへとへと」「『親密圏』での馴れ合いの議論ではなく、『公共圏』における他者との対話が自分を高める」といった議論の心構えを伝える。

さらに、グループ内で司会2人、代表答案作成者、議論のずれを指摘する係、プリントの回収係を分担し、その決め方は生徒に任せている。

授業デザインシート

【教科・科目】小論文

【設定時数】2時間中の2時間目

【テーマ・作品】「桃太郎と鬼」(佐賀大学文化教育学部国際文化課程の2015年度入試問題)

【本時全体の目標】生徒全員が、それぞれの答案における評価の根拠を説明できる。

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
【前回の振り返り】グループメンバーの答案を交換して読む	メンバーの答案を交換して読み、「同じアウトライン」なのに「答案が違う」ことに気づかせる。	<ul style="list-style-type: none"> 思考力 判断力 表現力 主体性 多様性 協働性 	宿題として個人で書いた答案をグループで読み合わせる。前回作ったアウトラインを自分のものにできたら確認させる。	「『同じアウトライン』なのに『答案が違う』のはなぜだろう？」 「アウトラインが書きにくかったのはなぜだろう？」	前回の授業を欠席した生徒が、スムーズに授業に参加できているか、机間巡視しながら声をかける。
【ガイダンス】本時の目標相互評価させる際の観点、留意事項	【本時の目標】 「全員が評価の根拠を説明できる」 【相互評価の観点】 ①問い手的確か：資料の理解は十分か、広告コピーの内容をきちんと踏まえているか。 ②具体例：広告のメッセージに対して適切な具体例か。広告のメッセージとの共通点を説明できるか。 ③構成：主張が明確に伝わる構成になっているか。	<ul style="list-style-type: none"> 知識 技能 	本時の目標と評価の際の3つの観点を提示。この観点が、授業を通して身につかせたい力であり、それを説明できるようになることを目標としている。講義や添削で「こういう風に答案を書きなさい」と伝えても、生徒はなかなか書くことができない。評価の観点に基づいて相互評価させることで習熟することを目指す。	答案を書いた生徒の気持ちに配慮すべきであること、そして答案はグループの協働の産物であり、作成した個人が責任を感じる必要はないことを再確認させる。	議論の時間を十分確保するため、ワークシートの作成には時間をかけさせない。提出を意識して丁寧に書く必要はないことを伝える。
【活動①】各グループの代表答案を読む「思考」	個人で、評価の観点を踏まえながら、ほかのグループの代表答案をしっかりと読み込む。	<ul style="list-style-type: none"> 技能 思考力 	【教師】 ほかのグループの代表答案をグループのメンバーで交換しながら読ませる。机間巡視と板書指示。 【生徒】 代表答案を交換しながら読む。その際、考えたことや気づいたことをコンパクトに、答案に書かせる。	「周りの人とペンの色を変えてごらん」 「丁寧に書かないでメモ程度で」 「3つの観点を意識して読んで」	コメントを丁寧に書いている生徒に、簡単に書くように声をかける。メモ程度にとどめ、議論の中で皆に伝えるように心がけさせる。
【活動②】評価と評価項目の立案「協働」	他者の答案を評価することを通して、正確な資料把握や問い手的確に答える力、設問の要求に沿った具体例を挙げる力を育成する。また、リーダーシップを持つ生徒がすべてを判断してしまったり、馴れ合ったりするのを防ぐため、態度目標として「一人ひとりが学びのプレイヤーである」「公共圏における他者との対話」を強調する。	<ul style="list-style-type: none"> 思考力 判断力 表現力 主体性 多様性 協働性 	【教師】 介入は極力避け、生徒の議論の時間を確保する。机間巡視で生徒の議論を聞き、疑問やアドバイスを板書する。必要な時は、1回だけ口頭で一斉介入する。 【生徒】 評価の観点を話し合い、それを決めたら各代表答案に、3段階で点数をつける。得点の理由を説明できるように留意させる。	「役割にとらわれず、気づいた人がやってみて」と声をかけ、役割が固定化しないようにする。制限時間が迫ったら、「終わらなくてもよいので、じっくり取り組もう」と呼びかけ、議論に集中させる。	評価すること自体が目的ではなく、活動を通して学習課題が浸透することが一番のポイントとなる。机間巡視で生徒の様子を見て気になる点を拾い、板書や声かけを通して議論をコントロールする。
【まとめ振り返り】評価の結果発表と生徒の振り返り	【まとめ】 リーグ戦形式にするなどゲーム性を盛り込むことで主体性・協働性を引き出す。 【振り返り】 取り組みを振り返ることで、学んだ内容の定着、活動中に感じた疑問点の整理などを行う。	<ul style="list-style-type: none"> 思考力 表現力 主体性 多様性 協働性 	【まとめ】 各グループの評価点を、生徒に板書させる。合計点を計算して上位者に拍手。 【振り返り】 形態は、A) メンバーを変えない、B) 指示して入れ替え、C) 全員で立食パーティー形式のフリートークのいずれか。	【まとめ】 「このグループは問い手的確だったね」など、振り返りの時にその答案に注目するきっかけを与える。 【振り返り】 生徒の状況を見ながら、足りない部分に働きかけていく。	教師からの評価は伝えず、生徒にもやもやを残し、考え続けさせる。授業後に個別に質問してきた生徒には説明する。振り返りは残り時間や生徒の様子を見ながら、A～Cのいずれかを行う。

*梨子田先生作成の授業デザインシートを基に編集部で作成

成果と課題

評価に納得せず、考え続ける生徒たち

そうした指導の最大の成果は、「評価に納得できない。高評価を得るためにどうしたらよいのか」と考え続ける生徒が増えたことだ。また、生徒は対策講座によって小論文の基礎をしっかりと身につけるため、スムーズに入試直前の個別添削に入るようになり、教師の負担も軽減されている。

今後の課題は、生徒たちの間に対話的な学びの作法とマインドを浸透させていくこと、協働的な学びの有効性を理解させることだ。

「多くの授業が主体的・対話的となれば、相乗効果が期待できます。生徒たちだけでよりよい議論や振り返りができるよう、学校全体の取り組みに広がっていけばと期待しています」

「役割が固定化すると、活動が硬直化する恐れがあります。実社会では、自分の役割を果たすだけでなく、周りに配慮できる視野の広さや柔軟性も大切です。リーダーシップを取るのが苦手なのに司会になった生徒がいれば、周りがフォローして議論を進める、文章の作成が苦手な生徒が代表答案作成者になれば皆でアドバイスするなど、一人ひとりが『学びのプレイヤー』であることを自覚して授業に参加し、協働性を培ってほしいと思います」